

17 開窓術後の慢性膿胸に対し単純創閉鎖術を施行した7症例の検討

小池 輝元・古泉 貴久・渡辺 健寛
 広野 達彦

独立行政法人国立病院機構西新潟
 中央病院呼吸器外科

【対象と方法】2000年～2004年に、開窓術後の慢性膿胸症例で、1例を除き従来の腔縮小術の手術侵襲が過大であると判断し、単純創閉鎖術を施行した7症例を対象とし検討した。

【結果】手術時間は平均49±33分、術中出血量は平均32±69mlであった。膿胸再発は1例認められたが、その後腔縮小術を行い治癒した。

【結語】開窓術後の慢性膿胸に対する単純創閉鎖術は低侵襲であり、また手術成績も概ね良好であった。細菌培養陰性でかつ気管支肺胞瘻がないか少数の症例で、全身状態不良の症例についてはよい適応であると考えられた。また単純創閉鎖術の低侵襲性、安全性、美容的観点などの利点を考慮すると、腔縮小術に耐えうる全身状態良好な症例にも適応があると思われる。

18 経皮的気管切開術の経験

上原 彰史・竹久保 賢・中山 健司
 大関 一

県立新発田病院心臓血管外科・胸部外科

呼吸不全、重症肺炎などで長期人工呼吸器管理が必要な場合、気管切開をおいて管理を行う。当科では2001年より経皮的気管切開術を導入した。その利点は、集中治療室や病棟で何ら特別な手術器具を必要することなく短時間で容易に施行できることである。これまで当科では17例の経験があり全例集中治療室で施行した。合併症は1例に術後皮下出血を認め皮膚縫合圧迫止血を施行したが、他には術後合併症を認めなかった。また相対的非適応とされている凝固異常(血小板減少2.2万)を認めた1症例では血小板輸血後に施行し出血は認めなかった。また頸部が太く短い1症例では皮膚切開後、気管を直接触診して穿刺部位を確認することで安全に行えた。施行方法、外科的気

管切開術と比較しての利点、及び合併症や最近のトピックについて若干の文献的考察を含めて報告する。

19 肺癌手術患者に対する退院後アンケート調査

古塩 純・小池 輝明・大和 靖
 吉谷 克雄・宮内 善広

県立がんセンター呼吸器外科

【目的】肺癌手術後患者に退院後アンケート調査を行い満足度、理解度を調査する。

【対象】H15年7月～H16年12月までに肺癌手術を受けアンケートの回答を得た285例。

【結果】医師の説明への理解は、大部分理解が42%、よく理解が46%、十分理解できないが10%。医師の診療態度は、良31%、優68%。看護師の態度は良33%、優66%。看護師のことは良30%、優66%。クリニカルパスについて大部分理解が24%、よく理解が28%、無回答が多く28%もあったため、クリニカルパスとは入院経過表のことと解説を入れた後では大部分理解が37%、よく理解が43%と増加したが、無回答は16%もあった。

【まとめ】医師看護師の診療態度については良好な評価であったがクリニカルパスについての理解は低かった。

20 大学病院での気胸手術～初期研修医にも気胸の術者は可能か?～

青木 正・土田 正則・橋本 毅久
 林 純一

新潟大学大学院呼吸循環外科

【目的】当科の気胸の特徴を分析し、研修医の気胸手術の妥当性を検討する。

【対象と方法】01年4月より4年間の気胸症例を対象とした。術式別に、手術時間や在院日数に有意差があるか検定した。術者についても検討した。

【結果】気胸は、76件であった。若年では胸腔鏡が、高齢では開胸が多かった。手術時間と在院日